

程にことまは天元五年になりぬ、三月十一日中宮たち給はんとて、おほきおとゝ急ぎさわがせ給、これにつけても右のおとゝあさましうのみ萬きこしめさるゝ程に、きさきたゝせ給ひぬ、いへばおろかにめでたし、大きおとゝのま給ふもことわりなり、帝の御心おきてを、世人も目もあやに淺ましき事に申思へり、一のみこおはする女御子證をおきながら、かくみこもおはせぬ女御子選の后に給ひぬるを安からぬ事に世人なやみ申て、すばらの后とぞつけ奉りたりける、

〔榮花物語三様々の悦〕今年をば正暦元年といふ、正月五日内條一の御元服させ給ふ、中二月には内大臣殿藤原道隆の大姫君子定内へ参らせ給有さまいみじうのゝしらせ給へり、中やがて其夜のうちに女御にならせ給ひぬ、中かゝる程に大殿藤原兼家の御心ちなやましうおぼしたれば、中五月八日出家させ給、この日攝政の宣旨内大臣殿かうぶらせ給、中攝政殿御けしき給はりて、まづ此女御后にすゑ奉らんの騒ぎをせさせ給ふ、略、中六月一日后にたゝせ給ひぬ、

〔後二條關白記〕寛治七年正月廿三日辛丑、未刻民部卿來臨相逢、参高陽院之由相語云、中納言□□著冠直衣、殿下藤原師實御使参女御子内親王篤告申立后事、廿五日癸卯、未刻参高陽院殿下参六條院給候御共、自院御方参新院給、殿下御坐殿上、即参院御前、頃之殿出自御前、御坐殿上、自懷中執出一紙、下給別當權大納言雅實給了殿下参内、其後被始殿上飲食、二獻頭辨三獻、右大辨、季仲、通俊黄昏程事了、引上達部等参内、左大臣右大臣頭辨勅使敷座、殿下圓座也、勅使西、源大納言取女裝束給勅使、殿歸給於座、頭辨於庭再拜、了簀子敷燈臺立、召陰陽師道時朝臣、令擇立后日時、付行家奉之、召行家、令書定文、如常、事了、被召日時、件勅文者、今夜出御日時也、廿七日乙巳、女御御出高陽院、其後今日有勅文云云、勅使延引之由有聞云云、二月十三日己未、戌刻於女御有勅使事如恒、鹿嶋使文覽、予開見即下云云、廿一日戊辰、参高陽院、南庇二階之立様所被沙汰、二階立西御屏風面東面也、其前立二階如常、有立后宣旨有一兩日、今日依主上御衰日、已以延引、左大臣、民部卿、左大辨等被申定、當日早且可被行之者也、